地域連携報告書

佐渡住民および佐渡滞在外国人ボランティアによる佐渡定住に関するワークショップ

Workshop on settling on Sado Island by Sado residents and foreign volunteers

藤田晴啓※* 赤塚陸* 杵鞭一馬* 外谷森太郎* 肥田野和紗*
Fujita Haruhiro, Akatsuka Riku, Kinemuchi Kazuma, Hidano Kazusa

概要

2023 年 9 月 16 日、佐渡市羽茂小泊集落にて、新潟国際情報大学藤田晴啓ゼミナール学生はワークショップを実施した。前年実施した同様のワークショップ「佐渡での住みやすい環境整備」というテーマからだされた「移動手段の充実」「子育て支援の充実」「学校の増設」「給料に合った物価」の 4 つを軸に、3 グループに分かれて、それらを実現するための方法について話し合った。実際に佐渡に住んでいて感じていることや佐渡を訪れて気がついたことなどから、佐渡の課題解決のためにどのような事業があるとよいのかについて意見を出し合い、考察することができた。

キーワード：ワークショップ　住みやすさ 定住 事業案 SWOT 分析

1 背景

新潟国際情報大学藤田晴啓ゼミナールは、2012 年から佐渡市小泊集落の協力を得て、集落世帯の意識調査を実施してきた。2020 年は小泊集落にて、2021 年および 2022 年は小泊集落および佐渡総合高校にて、佐渡の若者流出という課題をテーマにワークショップを開催し、併せて質問票調査を行ってきた。2023 年は、佐渡総合高校でのワークショップは実施せず、9 月 16 日に佐渡市羽茂小泊にて小泊・亀脇集落住民と佐渡に長期滞在活動中のワールドユナイテッドジャパン外国人ボランティアを含めた合計 23 人の参加を得て、 佐渡の課題改善に関するワークショップを行った。本稿ではその結果を報告する。

2 ワークショップ SWOT 分析結果

佐渡在住者を対象としたワークショップは、A グループと C グループの 2 つの日本人グループおよび外国人ボランティアを主体で構成した B グループの、計 3 グループに分かれて実施した。

A グループと C グループは、学生 3、4 名と島内在住者 3 名ずつが参加し、B グループは外国人ボランティア 4 名と通訳 1 名、本学学生で Communicative English Program（CEP）履修者 2 名が参加した。ファシリテーターは、司会進行役として日本語の説明者 1 名と英語の説明者 1 名、AC 各グループに 1 名ずつ配置された。2023 年は、前年から開始した外国人ボランティアとのワークショップを踏まえ、3 名が事前に CEP を履修し、英語説明者も含めコミュニケーションをより円滑に取れるように準備した。

まず、昨年のワークショップからでた案の中からテーマを 1 つ選び、マインドマップで意見を

※ fujita@nuis.ac.jp
* 新潟国際情報大学経営情報学部経営学科

広げた。A グループは「移動手段の充実」、B グループと C グループは「子育て支援の充実」をテーマに選び、話し合った。その後、テーマの改善策となる事業案を具体的に考え、SWOT 分析をしたうえでグループごとの発表を行った。

A グループでは、最初にいくつかの移動手段をあげていき、そこから事業を考えた。実際に佐渡に住む方の意見や、ワークショップまでの 2 日間を通して藤田晴啓ゼミナール生が感じたことを参考に、狭い道でもとりまわしやすい「ハイエース型バス」を提案した。ハイエース型バスは、従来のバスに比べて狭い道でも小回りがきいて走りやすいこと、予約制にすることで乗客の待ち時間などが短縮されること、料金が月額制で分かりやすいことなどが利点である。民間と公共が合同で運営し、船の時間や学校の時間、病院の時間などに合わせて運行時間を決めるという方向性で話し合いを進めた。運営資金は、銀行からの融資と市の予算から用意し、運賃を月額制で一世帯月 2500 円、年 28000 円で乗り放題とした。運転手不足については、市町村有償運行制度を利用した事例を参考に、地区内のリタイア人材を活用するなどの案が出された。SWOT 分析では、利用者の自宅近くまで送迎できるため、バス停まで行くことが難しい人なども利用しやすいこと。予約制なので乗客と運転手共に効率的であることなどが強みとしてあげられた。また、免許返納者の交通手段になるという意見があげられた。一方、人手不足や適した車にするために費用、予約制による時間や運行距離の不安定さなどの弱みと、車所持者が多いこと、ガソリン代の高騰、路面の不安定さなどの脅威があげられた。これらのことから、誰もが使いやすく、乗客にも運転手にもハードルが低い運行制度にすることで、ハイエース型バスが移動手段として有効になるようにする必要があるとまとめた。

B グループでは、「子育て支援の充実」について話し合いを行った。最初にマインドマップを作成した際に、「どの年代の子供をターゲットにするのか」、「サービスを利用するユーザーとサービスに対してお金を払うカスタマーにどのような人々を設定するのか」を重要な要点として話し合いを行った。話し合いで出た案は主に、佐渡の子供たちへの支援の充実、学生参加型の佐渡の魅力のPRイベント、海外留学生を佐渡に招くなどの様々な意見があげられた。B グループでは子育て支援と学生参加型の佐渡の魅力 PR イベントを組み合わせた佐渡のサマーキャンプおよびウィンターキャンプを提案した。提案の具体的内容としては、参加者を 6 歳から 12 歳、13 歳から 15 歳、16 歳から大人までという 3 つのグループに分け、期間は最短で 1 週間、最長で 6 週間とした。6 歳から 12 歳までのグループはゲームを用いた様々なアクティビティ、13 から 15 歳までのグループはアクティビティに学びの要素を加えたキャンプ、16 歳から大人までのグループは学びや文化の体験活動など専門的な内容を学ぶことのできるキャンプやアクティビティを実施する。アクティビティの内容としては、佐渡の伝統文化や伝統料理を学ぶ体験やウォータースポーツ体験、農業体験などがあげられる。運営資金としては政府からの助成金や参加者から参加費用を取り、スタッフは佐渡に住んでいる方々や学生スタッフ、ボランティア募集で人員を集めることとした。これらのイベントの宣伝方法としては、Web サイトや SNS、学校でのポスター掲示を行うこととした。提案内容がまとまった後は SWOT 分析を行った。SWOT 分析では「佐渡には朱鷺や自然などユニークな魅力がたくさんある」という強みがあることや、このイベントを行うことで「佐渡の人口や観光客の増加、新たなビジネスチャンスの創出につながる」ということが機会としてあげられた。しかし弱みとして、「スタッフの確保の難しさや運営コストが高くなる」ことがあげられた。

また、脅威としては「参加者が他の魅力的なサマーキャンプに参加してしまう可能性があることや、少子高齢化により佐渡の伝統文化や伝統料理を知っている人が減少していること」があげられた。これらのことから、佐渡のサマーキャンプ及びウィンターキャンプを実施するためには地元の方々や行政の協力は不可欠である。これらのイベントを実施することができれば、佐渡への移住者や観光客の増加、新たなビジネスチャンスの創出につながり、佐渡の発展や魅力向上に大いに貢献するのではないかとまとめた。

C グループでは「子育て環境整備」について話し合いを行った。最初のマインドマップを行った際、亀脇集落から親子で参加された住人の意見として、佐渡で子育てをする上で便利な点として、「同世代の子どもが少ないため競争力がない」、「家の周りに人がいないため、うるさくしても何も言われない」、「大自然の中で子供をのびのびと育てることができる」という意見があげられた。一方で、「子どもの医療費の無償化」や「給食で佐渡の特産物をもっと扱ってほしい」という意見もあげられた。また、子供がいない参加者からの意見として、子育てをする環境を整備する以前に、若者同士の交流の場が佐渡市にはないことから、若者たちが出会えるコミュニティの場を設けるのが良いのではないかという意見から、C グループでは佐渡の土地や食材を生かした「佐渡ビックフェス」を提案した。「佐渡ビックフェス」の大まかな流れとしては、新潟からフェリーで夕日や海の景色を見ながら佐渡へ行き、一泊した次日に北沢浮遊選鉱場跡で一日音楽フェスを行う。屋台では佐渡の特産物を使用したフェス飯を提供し、アーティストの入れ替えの合間に佐渡の PR や太鼓の演奏などを行う。「佐渡ビッグフェス」をきっかけに佐渡の景色や食、文化を知ってもらい、佐渡に魅力を感じた人たちが交流できるコミュニティの場を設けることで、コミュニティが若い世代同士の出会いの場となり、子育て世代へのコミュニティへと繋がるのではないかという案がだされた。SWOT 分析では、「島外の人が来るきっかけ作り」、「若者に魅力を伝えることができる」などが強みとしてあげられた。機会としては、「競合が佐渡では少ない」、「佐渡金山が世界遺産に登録されたら人が増える」などがあげられ、弱みでは、「人が来るか」、「前例がないため不安である」、「資金面の問題」があげられた。脅威では、「天候」、「他イベントとの差別化」、「メインターゲット以外が増えてしまうこと」などがあげられた。これらのことから「佐渡ビッグフェス」を行うには、佐渡の人々や民間企業、行政の協力が必要不可欠であるが、前例がなく、競合が少ないからこそ、若者たちが集まれる良いきっかけになるのではないかとまとめた。

3 まとめ

今回のワークショップは、経営主体や資金源などを含めた事業案を考えるという難しい内容であったが、どの班も最終的には具体的な事業計画案を完成させることができた。B 班と C 班が取り組んだテーマ「子育て環境整備」は、経営主体が民間のみでも考えることができたため、全体を通してアイデアが多く出ていたが、A 班が取り組んだテーマ「移動手段の充実」は、経営主体が民間のみでは経営・運営が厳しいテーマであったため、特にマインドマップではアイデアがでにくかった。事業案を考える段階からは、どの班も多くのアイデアが出て、議論が盛り上がった。
進行の反省点として、チーム決めに時間をとってしまったことや、ゼミナール生同士でワークショップの内容を細かい部分まで確認できていなかったことがあげられる。今後のワークショップでは、詳細をなるべく早く決定し、ゼミナール生全体で共有する必要があると考えられる。
一方で、2022 年の反省点であった外国の方とのコミュニケーションに関しては、事前に対策をし

てスムーズに話し合いを進めることができた。また、通訳の方が付き添っていたため、他の班の日本語のまとめを英訳してもらうことで、外国人ボランティアにも理解しやすいワークショップにすることができた。

4 おわりに

今回は、2022 年のワークショップ結果を引き継いで、より具体的に話し合いを進めた。佐渡市の課題として前年あげられた「移動手段の充実」「子育て支援の充実」「学校の増設」「給料に合った物価」は、ビジネスでの解決を試みた場合、いくつかの問題点がある。例えば人口減少による人手不足や収益化の難しさなどがあげられる。そのため、今回のワークショップででた案のように、島内のみならず島外から人を集めるような企画を積極的に行っていくことが有効であると考える。

謝辞

ワークショップに参加、ご協力いただいた佐渡市羽茂小泊・亀脇集落の役員、住民の皆様に厚く御礼申し上げる。特に、「小泊活性化友の会」代表岡崎一也さんには毎年大変お世話になっており、2023 年も準備や運営に多大なご協力をいただいた。岡崎さんと小泊集落の皆様のおかげで、2012 年から毎年欠かさず学生を中心とした交流を続けられていることに感謝する。

また、小泊におけるワークショップにご参加いただいた集落の方々、ワールドユナイテッドジャパンの外国人ボランティアおよび通訳の 5 名にこの場をお借りして感謝したい。外国人ボランティアは小泊近隣の寺に半年ほど寄宿して佐渡にてボランティア活動を続けており、多様な視点の意見を聞くことができ、ワークショップの質的な向上に寄与いただいた。

最後に、令和５年度域学連携地域づくり応援事業による佐渡市からの助成をいただいたことで学生の宿泊費・交通費が支出でき負担軽減につながったことを感謝する。本研修が佐渡市の地域づくりに貢献できることを祈念している。

参考文献

1）藤田晴啓 尾仲峻頌 他　佐渡の高校生および若手在住者に対する定住に関する
ワークショップと意識調査報告　－ SDGs 定住プログラムと情報拡散 －
新潟国際情報大学経営情報学部紀要 Vol.5（2022）72-81
2）藤田晴啓 尾仲峻頌 他　佐渡の高校生及び若手在住者に対する佐渡定住に関する
ワークショップと意識調査報告Ⅱ-SDGs 定住プログラムと情報拡散-
新潟国際情報大学経営情報学部紀要 Vol.6（2023）62-78
3）藤田晴啓　社会や地域との連携　新潟国際情報大学
https://www.nuis.ac.jp/27653-2/
4）佐渡市総合計画に関するアンケート調査・ワークショップの結果
新潟県佐渡市公式ホームページ（city.sado.niigata.jp）
https://www.city.sado.niigata.jp/site/plan/26004.html